

【実践報告】

「幼児の理解」の報告

広島文教大学教育学部教育学科

准教授 牧 亮 太 教授 上 村 加 奈

1 はじめに

本科目は幼稚園教諭・保育士を目指す学生が1年次後期に履修する科目であり、たくましい実践力のある保育者になるための第一歩となる科目である。2日間の実地観察を通して、幼児の心の動きを捉え、記述するための方法を修得するとともに、子ども理解の重要性を体験的に理解することをねらいとしている。2024年度の履修者は23名であった。

2 概要及びスケジュール

2024年度の実施スケジュールは表1のとおりであった。実地観察①では、幼稚園の1日を観察し、活動の流れと学生自身が心を動かされた場面を記録にまとめた。その記録を基にグループワークをおこない、エピソード記録の書き方を学んだ。実地観察②では自由遊びの時間に幼稚園を訪れ、子どもと一緒に遊びながらの参与観察をおこなった（1～2時間）。その後、最も印象に残った場面をエピソード記録にまとめ、校種間交流をおこなった。

表1 2024年度の実施スケジュール

日にち	主な内容
10/ 3	ガイダンス
10/10	子ども理解の意義
10/17	心がまえ・諸注意
10/24	観察の目的
10/29, 30, 31	実地観察①
11/ 7	記録に基づいた討議
11/ 7	エピソード記録の書き方
11/21	エピソード記録に基づいた討議
11/26～12/10	実地観察②
12/12	討議と発表
12/12	校種間交流会の準備
1/16	交流会（1）：エピソードの共有
1/16	交流会（2）：グループワーク
1/23	校種間交流会の振り返り
1/23	まとめ

注：下線部は「児童の理解」「生徒の理解」と合同

3 成果と課題

授業全体の振り返りとして、子どもに対するイメージの変化について尋ねたところ、「とても変わった」「変わった」「少し変わった」と回答した学生が、それぞれ50.0%、38.9%、11.1%と、何らかの変化があったことが確認できた。実際に子どもたちの生活や遊びを見ることで、素直でかわいいといったステレオタイプの子どもイメージから、一人ひとり違う、しっかり考えている、といった子どもの個性や内面に注目するようになったことがうかがえた。また、昨年度から形式を変えた校種間交流会では、それぞれが印象に残ったエピソードを発表し、「子どもって〇〇」というテーマについてお互いの考えを出し合った。その後、各グループが考えた「子どもって〇〇」を全体で共有したが、そこから新たな議論が生まれ、子ども理解を深めていくようなやりとりも見られた。校種間交流後の振り返りには「子どもたちを教師や保育者の固定概念で型にはめてはならない、そして子どもたちの可能性を信じるのが大切だと思った。」「子どもを理解するためには、一人ひとりに注目してその子を理解しようとする意識が大切だと思った。」という記述も見られ、子どもと関わる際の態度や姿勢について自ら考えるきっかけにもなったようであった。

なお、今年度は新たな取組として、「心がまえ・諸注意」の回に就職課と連携を図り、社会人に求められるマナーの基礎について指導していただいた。現在の指導体制をより充実させていくためにも、引き続き、教職センターや他部署との連携をはじめ、その方策を探っていきたい。